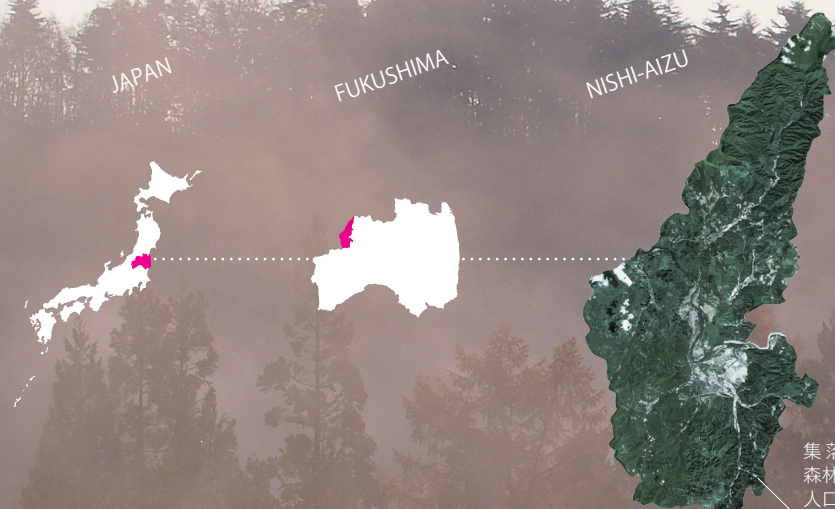


LIFE WITH NISHI-AIZU

ー ラ イ フ ・ ウ ィ ズ ・ ニ シ ア イ ツ ー

TAKE FREE

西会津町をもっとよく知るためのFREE PAPER



集落：89 集落
森林面積：86%
人口：約 6800 人

日本の田舎、西会津町。

NISHI-AIZU, The real Japanese rural experience.

福島県西会津町は、福島県と新潟県の境に位置する、人口約6800人の町。『一生に一度の願いは、3年続けてお参りすれば、なじよな（どんな）願いでも聞きなされる』大山祇神社が有名で、北方には霊峰・飯豊山が控え、農林水産大臣賞に輝いたミネラル野菜や、食味コンテストで日本一に輝いたお米・しいたけなど、美味しいお水と空気が、自然からの恩恵を受ける、山と水の神の宿る町です。阿賀川により日本海と通じる地形は、古来より交通の要衝としてこの地に繁栄をもたらし、時代毎に多様な文化を育みました。縄文時代の複雑な造形の土器や、修験道や山の神の聖地・信仰の地、中世の数多くの山城（館）跡、会津と新潟を繋ぐ越後街道の宿場町の面影や、明治の松下村塾と言われた「研幾堂」など、探れば探るほど深い文化が根づいています。そして今、西会津国際芸術村にはクリエイティブな人材が集まり、地域が失いつつある歴史・風土・民俗・文化・伝統技術をデザインやアートの持つ創造の力と融合し、再生していく取り組みがはじまっています。

この冊子では、実際に西会津町に暮らし、新たなライフスタイルに挑戦する4名の方々にフォーカスしながら、西会津の魅力と関わり方を紹介します。

P.03 Dear Readers

P.04 西会津のある暮らし File no.1 三留朋江

P.08 西会津のある暮らし File no.2 三留弘法

P.10 西会津のある暮らし File no.3 笠間拓朗

P.14 西会津のある暮らし File no.4 横山萌美

P.16 「LIFE WITH NISHIAIZU」とは？「日本の田舎、西会津町。」とは？

P.18 24-ID を、ご存知ですか？

P.22 西会津町の移住支援制度について



西会津のある暮らし

File no.I



漆文化を西会津にも根づかせたい
故郷で磨く、伝統の技

三留 朋江

Tomoe Mitome

1990年、西会津町生まれ。2011年に短大を卒業後、会津漆器技術後継者訓練校に入校、塗専攻で技術を学ぶ。2014年からは漆工家・富樫孝男氏に師事。2016年に独立した。これまでに日本漆工協会漆工奨学賞を2度受賞している。

会

津漆器は安土・桃山時代から続く会津の伝統工芸のひとつ。縁起の良い図柄や多彩な加飾の美しさが知られています。この伝統を受け継ぐ職人のひとりとして、西会津町に工房を立ち上げたのが同町出身の三留朋江さん。自宅の離れの二階が彼女の仕事場。幼い頃から肌で感じてきた空気が、創作活動にもいい影響を与えてくれると言います。

「漆器に初めて触ったのは短大の頃です。恥ずかしながら、それまで漆器というものを知らずに育ちました。こんなに身近に、こんなに素敵なのがあったなんて！という感動を今も覚えています」

短大を卒業後、一度は就職したものの、導かれるように漆の道へ。「会津漆器技術後継者訓練校」で学んだのち、師匠のもとで2年間の修行の日々。2016年に念願の独立を果たしました。「ひとりの不安はありますが、甘えてもらえない！と思って自分を奮い立たせています」

ふんわりと優しい雰囲気のままですが、意外にもその作風は落ち着いていてクール。一見漆器とは思えないメタリックな風合いが目を引きまします。

「漆には気持ちが出るんです。集中できていなかったり、焦っていたりすると、途端に失敗。でもそこが面白いんですけどね」

忙しい毎日の中にも、気に入ったお皿、器を使うことで心の落ち着く時間を提供したいという三留さん。使い続けることで味が出てくる漆器は、育てる楽しみのある器でもあります。

「会津漆器の製造元といえば、会津若松市や喜多方市が盛んですが、西会津町にも根付かせること、まずは身近に感じてもらうことが今の願いです」

そんな彼女に西会津町の好きなところを聞くと「お祭り！」と元気な答えが返ってきました。「私、お祭りが大好きで、その時期になると血が騒ぐっていうか（笑）。地域の人みんなと一緒に文化を継承していく、そういう土地であることが誇りです」



「地域の人みんなと一緒に文化を継承していく、そういう土地であることが誇りです」

大山祇神社の参道

大山祇神社は野沢（西会津町の中心市街地）の山の神として広く知られた神社。一生に一度の願いは三年つづけてお参りすれば、なじょな（どんな）願いもききなさると言われ、年間十三万人近くの参拝者を集めています。遥拝殿から本社に行くまでの参道は、杉が林立する神聖な森の小径。

約1時間半の軽いトレッキングコースとしても人気があります。



西会津のある暮らし

File no.2

農業の盛んな西会津町では、さまざまな野菜の生産者さんと出会うことができます。そのひとり三留弘法さんは、菌床キクラゲの生産農家。3つのハウスで約9000菌床のキクラゲを栽培しています。

「キクラゲは比較的栽培がしやすく、収穫量も多い作物です。会津には『こづゆ』がありますよね。あれには必ずキクラゲが入っています。地元の食材を郷土料理に使えるということもあって、本格的な栽培は初めてでしたがなんとか軌道に乗せることができました」

三留さんは四国出身の東京育ち。西会津町に移住してくるまでは、南国・石垣島でバーを経営していました。現地で奥様と出会い、2008年に奥様の実家のある西会津町へ。山に囲まれ、冬は大雪に閉ざされる生活にカルチャーショックを感じた三留さんでしたが、初めてだったのはそれほどではありません。

「農業のへ」の字も知らずに、

農家になりました。毎日が発見と学びの連続。ベースもない中、試行錯誤しながらノウハウを確立したり、販路の確保をしたり。大変なこともあります。育てる喜びはそれ以上です」

なるべく自然に近い環境で栽培された三留さんのキクラゲは、肉厚で大きく、歯ごたえがよいと評判。今では西会津町の新たな特産品にもなっています。また、震災後は福島県産品のPRを行うNPOの一員として、風評被害払拭のための活動にも積極的。忙しい毎日を送る三留さんですが、西会津にやって来て感じたことがあると言います。

「農家に転身したことで、子どもと過ごす時間が多くなりました。上の子は夏休みなんかは手伝いもしてくれそうですね。家族といつも近くにいられるというのは、農業をやっているからこその特権だと思います。向こうはうっとおしいかもしれないけど（笑）」

家族の存在を力の源に、三留さんの挑戦は続いていきます。

西会津に新たな名産を！ 南国から移住した農家の挑戦



三留 弘法

Hironori Mitome

1972年愛媛県生まれ。東京育ち。「西会津弘法の郷」代表。沖縄での暮らしを経て、2008年から奥さんの地元である西会津町に移住し、菌床しいたけ栽培を開始。2010年より完全無農薬の菌床きくらげ栽培をはじめ、現在では、きくらげを使った加工品などの販売も手がけている。





西会津のある暮らし

File no.3

会

計事務所にポスティング事業、コンサルティングにレストラン経営と、ひとりでは何足ものわらじを履きながら、忙しい日々を送る笠間拓朗さん。西会津町の出身で、現在は同じく福島県内の新地町と二拠点居住をしています。もともとは新地町の商工会に勤めていたという笠間さんが、西会津に戻るきっかけとなったのは東日本大震災で被災した経験にありました。

「海から1キロほどにあったアパートは流され、着ていたスーツと車と靴だけが残りました。幸い命は助かったものの、周りには自宅がなくなったり、幼い頃から見てきた風景そのものが変わってしまったという人もいて、自分の中で故郷に対する思いが変わりました」

当たり前だったものが突然なくなってしまう恐ろしさ。西会津に置き換えて考えたとき、いても立ってもいられなくなり、地元に戻ることを決意したそう。「たとえ災害は起こらなくても、このまま人口が減り続けたら

スーパーや学校もなくなるかもしれない。インフラが整わなければ、住む人や働く人もいなくなる。町の存続が難しくなるでしょう。そのためには働ける場所や仕事が必要。潜在的な人材を掘り起こし、事業作りをしていくことが大切だと考えます」

2016年にオープンさせた「KURA. Restaurant&Cafe」は、そんな笠間さんの思いを体現する場所。お店にきた人同士が繋がり、交流することで新たな動きを生み出したいと言います。

「僕の仕事はバラバラに見えて実は全部繋がっているんです。何か事業を起こしたいという人がいたら会計やコンサルの知識を提供できるし、イベントがしたいならお店を貸し出すことも、チラシを撒いて宣伝することもできます。本気で事業をしたい人を応援したいんです。西会津は小さい町ですが、動いている感じがしてとても刺激的。これからの時代に本当に必要な社会の仕組みが生まれる予感がしています」



笠間 拓朗

Takuro Kasama

1986年、西会津町生まれ。高校卒業後、裏磐梯猫魔ホテルに就職。新地町商工会を経て独立。会計事務所及びコンサルティング業務を主とする一般社団法人の代表を務める。2015年に西会津町にUターン。現在に至る。日商簿記1級、財務会計主任者試験1級などの資格あり。





「これからの時代に本当に必要な社会の仕組みが生まれる予感がしています」

西会津国際芸術村

廃校となった木造校舎（旧新郷中学校）を、創作活動・ギャラリー・地域文化の育成・グリーンツーリズム等の拠点として活用している文化交流施設。この施設では、地域の持続可能性を模索するため、自然と人間の付き合い方を見つめ直しながら、“芸術”を広く人間の暮らしを支える“技”や“知恵”としてとらえ、地域が失いつつある歴史・風土・民俗・文化・伝統技術をデザインやアートの持つ創造の力と融合し、発信しています。近年では、この場所を中心にクリエイティブな人材が西会津に集まってきており、町外の人間と地元住民の交流の場や移住者の拠り所ともなっています。



西会津のある暮らし
File no.4



この町で生きて行く
ある地域おこし協力隊の決意

横山 萌美
Moemi Yokoyama

1987年、神奈川県生まれ。2014年に、地域おこし協力隊として西会津町に赴任。観光業務に携わり、町の情報発信やツアー企画などに取り組む。協力隊任期終了後はディープな西会津町を紹介するコンシェルジュとして活動予定。特技は人と話すこと、誰とでも仲よくなれること。

「西 会津町ではハブニングみたいな出会いがよく起きます。集落をぶらぶらしている時に、ちょっと話しかけたおばあちゃんと突然お茶会が始まったり。そういう日常が楽しすぎて、飽きないんですね」(笑)

そう話す横山萌美さんは、2014年に『地域おこし協力隊』として西会津町に赴任してきました。主に情報発信や観光業務に携わり、町のPRイベントで各地を飛び回っています。もともと、地方で活動することに興味があった横山さんが、西会津町を選んだ理由は、「人の温かさ」。まだ協力隊になる前に、ひとり旅で訪れた時のこんなエピソードを覚えていると言います。

「マップをもらいに役場に行った際、対応してくださった人が親切にいろいろ案内してくれて。突然やってきた見ず知らずの私にも気さくに声をかけてくれることに感動しました」

晴れて協力隊になってからは無我夢中の日々。地元の仕事には片っ端から参加、町を歩いて集落の名前や道を覚えめました。今では農泊のおかずの相談をされるほどの慕われぶり。

「困った時に助けてもらったこともたくさん。町の人たちは私の先生です。でも、そのせいでちょっと困っているのが、やたらと結婚を心配をされること。うちの息子、孫のお嫁さんに！と言われるのはうれしいのですが……」(苦笑)

さまざまな出会いを経て、西会津のトリコになってしまった横山さん。協力隊の任期である3年間の活動を終えたあとも町に残ることを決めました。

「まだまだ西会津を知りたいんです。それに、今はどこ行っても『協力隊』と言われてしまうので、肩書きのない普通の住民になりたいな」

「日本の田舎、西会津町。」のある暮らし



presented by

LIFE WITH NISHIAIZU

- 西会津のある暮らし相談室 -